

天皇の踏絵

小川三雄

小川三雄

天皇の踏絵

サンケイ新聞社

天皇の踏絵

小川三雄 著

著者略歴 明治45年岐阜県池田町田中に生まれる。幹部候補生出身の陸軍大尉。終戦時は満洲東部国境付近の大隊長。ソ連に抑留されること5年。昭和25年春、一般者として最後の帰還船で帰国。現在岐阜県揖斐川町で洋装店経営。

〈検印者略〉 ㊂

定価 四八〇円

昭和44年8月10日発行

発行者 田村彬

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一の七(103)
大阪・北区梅田町二七(530)
印刷 図書印刷株式会社
製本 田中製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

目次

まえがき

7

強制収容

11

ウソつき

11

ヒゲと運命

14

ラーゲル

15

身上名簿

20

作業開始

23

六番工場

28

労働の質と量	30
嘆きの薪割り	32
国有財産	36
ウオツカ工場	40
コルホーズの性	42
黒パンと馬鈴薯	48
モミつき米	51
スパイ工作	56
奇怪な密告者	56
密林への追放	61
友の会	65
大和撫子	68
大尉偕称	71

壁新聞

忌諱

諜報網

スパイ強要

伐採の犠牲者

逃亡

望郷

楽劇団

歌誌「山なす」

ウオストーク一号

極東政策

部隊の帰国

またも、だまされる

狂った運命

囚人列車

ハバロフスクの駅

荷物棚での売春

雨と銃剣

郡上節

カーチンの森

法螺天国

白樺の肥料

血は水よりも薄し

草地組

水と油

特別中隊解散

戦犯摘発

鮭の味

炭坑節

アムール河

めぐりあい

シベリヤ三ヶ条

天皇の踏絵

自決を決意

吹雪の抵抗

零下六〇度

四十七士

死神

鬼畜

209

209

210

216

221

225

228

232

237

237

245

251

254

人民裁判

面壁九年

ソ連声明

スターリン感謝文

帰 国

絶望感

罪人宣言

蒸 発

逆送組

悪魔の手

船は動いた

祖国の土

「天皇の踏絵」に寄せて

317

310

303

297

293

286

281

278

278

273

270

266

261

まえがき

昭和二十五年春、ソ連から最後の帰還船「高砂丸」が胸に日の丸をつけた三〇〇〇名の元軍人軍属を乗せて東舞鶴に着いた。その中に小川大尉をふくむ十八名の異色グループがあった。

この記録は、その小川大尉を中心として、大隊長時代のソ連収容所の実態と、敵中であって、敢然と、将校の労働を拒否し、思想の自由を叫んで、あらゆる脅迫と闘いつづけてきた異色グループをえがいたものである。

大部分の抑留者が帰った初めの三年間ほどは、労働はきびしく、思想攻勢もあるにはあったが、まだ精神的な苦痛は少なかった。それでも体の弱かった者は、ソ連が通信を伏せた最初の一年に死んでいった。もっともひどかった収容所では、一〇〇〇名中八〇〇名ほども死んでしまった。それらはみな栄養失調だった。

抑留が三年を過ぎたころから、ソ連の戦犯摘発がきびしくなった。このころから、どこの収容所でも日本人による日本人の裁判が行われ、毎日幾人かずつが、隠していた前身を暴露され、戦犯として刑務所へ送られていった。それは、共產主義者になるには自己批判が必要であり、自己批判は「自分や他人の前歴を暴露することで許される」という教義のもとで行われた。

日本人同士が、血を血で洗うおそろしい毎日がつづいた。暗黒悲惨、あさましいかぎりであった。思想の仮面をかぶって、自分が救われるために他人を陥しいれる。これがかつて優秀民族を誇った日本人の姿だろうか。

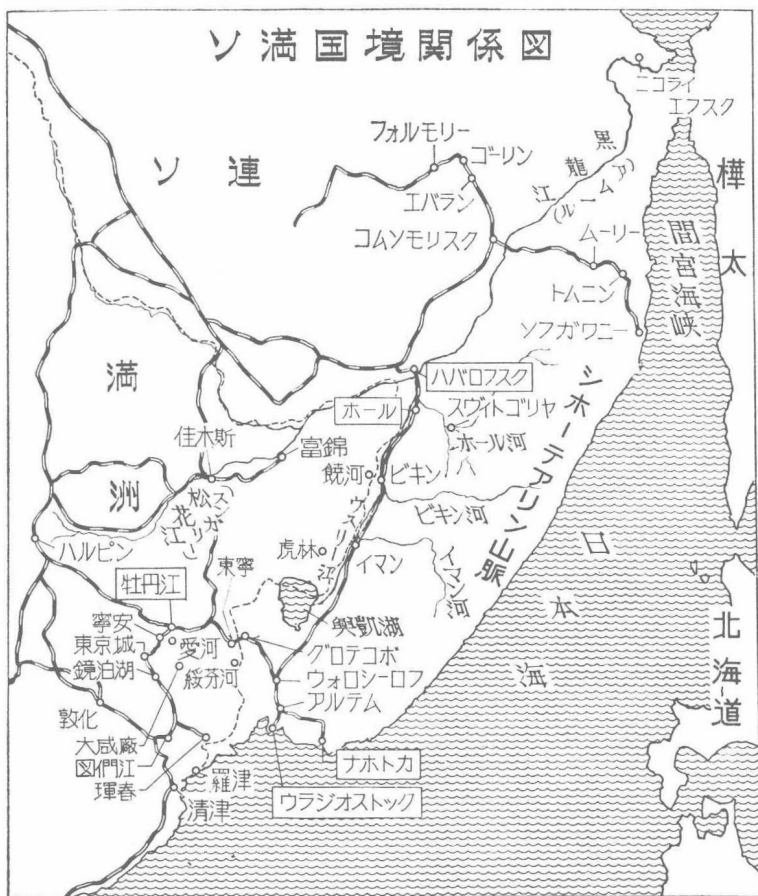
小川大尉や、そのグループも決して事を好んだのではない。平穩に、一日も早く帰国を願うことには変りはなかった。あえて敵中に偽装することを拒んだわけでもなかった。でも事態はそれを許さなくなった。小川大尉たちは敢然と起ちあがった。そして反ソ反共反労働の旗印を鮮明に掲げた。この同士は最初一七六名で、その精神的中心は元関東軍参謀の草地大佐だった。したがって、このグループを人は「草地部隊」と呼んだ。陰險なソ連の脅迫と、猛烈な日本人による日本人の吊しあげが始った。ハバロフスクの日本人共産主義者の本部で発行する「日本新聞」は毎日デカデカと草地部隊の罪状？を書きたて「白樺の肥料にせよ」と攻撃した。草地部隊は浮草のように転々と収容所をかえられた。そして、その行く先々で大事件を捲き起こした。死を賭けた抵抗の下に……。そして草地部隊の勇名？は全ソ日本人抑留者の間に轟きわたった。

この一団にたいし、日本人たちは常に「一線を描く」という言葉を用いて頑張り通した。表題の「天皇の踏絵」も、その事件の一つである。「草地部隊」を題名にしようとも考えたが、草地さんに遠慮して避けた次第である。

小川 三雄

天皇の踏絵

ソ満国境関係図



強制収容

ウソつき

かつて、東満の軍都を誇った牡丹江を出発したソ連の輸送列車は、外から嚴重に錠をかけて、どこへ行くのか、もう一昼夜も走りつづけていた。この列車には、東部国境の町東寧で編成され、大威廠という後方山岳地帯でソ連機甲部隊を迎撃中、終戦の大詔を拝し、心ならずも干戈をおさめて、ソ連に収容された第六四七部隊（第二八師団歩兵聯隊）の主力が乗っていた。聯隊長はどこかへ連れ去られ、部隊は二つの大隊に再編され、一つは西尾大尉が、片方は小川大尉が指揮をとっていた。

地図も磁石も時計もみんな奪われ、しかも閉めきられたままの貨車の中では、時間の経過も、方位の判定も確かではなかったが、どうやら列車は、昨夜、スピードを増してソ満国境を通過したらしいことだけはわかった。ようやく扉の隙間を透してさしこんできたほのかな光に、小川大尉は朝のおとずれを知った。なんとかして列車の方向が知りたかった。外がのぞきみえる個所をさがした。

すると、貨車の上方に尺たらずの長方形の明り通りの窓があるのを発見した。こじあけて、むさぼるように外を見た。大陸特有の真っ赤な、大きな太陽が、遮ぎるものもなく広くひらけた地平線にボ

ツカリ昇ったところである。正しく列車は北を向いている。今まで東へ東へ走りつづけていたと思われた列車が、つい先ほどから北へ方向を変えたように感じた大尉の勘は不幸にも的中していた。

列車はウォロシロフを通過し、ウラジオストクに向かう分岐点から北上したことになる。大尉は、この列車が、帰国のためにウラジオストクに向かうのではなく、ソ連深部へ走っていることを認めないわけにはいかなかった。

鏡泊湖の近くにある東京城付近に集結させた日本軍の全将校を前に、同地区のソ連軍司令官某中將は輸送前、「諸官は近く極東の某港から帰国するだろう」と言明し、輸送指揮官も、この列車が「帰国列車」であることを幾度も教えていた。

われわれも初めはそれを完全に信じていた。終戦の条件がどんなものかは知らなかったが、日本流に考えて、いやしくもソ連の軍司令官が嘘をいうとは思えなかった。最初の集結地東京城から、朝鮮の港のある清津か羅津はすぐである。それを、朝鮮に出ず、幾日も行軍して反対の牡丹江に北上し、帰国を待機することは、すでにおかしなことであった。が、しかし手前勝手の理屈をつけてわれわれは疑おうとはしなかった。多少の不安がなかったわけではないが、しいてその不安を打ち消していた。牡丹江では安心して貨車に乗った。帰国を信じていたので逃亡する者は一人もいない。兵は愉快にはしゃいでいた。そのうちに機関車が入って来た。思いもよらないことが起こった。頭は日本のほうではなく反対のソ連のほうにつけられているではないか。しかも扉は外から嚴重に錠がかけられてしまった。それでもまだ、だまされたとは思っていないかった。いや、思いたくなかった。溺れる者は藁をも掴むの例で「帰す」と言明した將軍や、輸送指揮官の言葉にすがって、崩れようとする自分を励まし、慰め、力づけていた。清津、羅津、釜山の夢は消えたが、まだウラジオが残っていた。

自己流に解釈するのにつごうのよいことには、將軍の帰国言明は「極東の某港」ということであった。ウラジオも当然「極東の某港」に含まれるだろう。こんどはウラジオを信じにかかった。「信ずる」というより「念じた」というほうが正しかった。兵も半々に分れて「帰る」「いや帰れぬ」と争っていた。「帰れぬ」という組も、「帰れる」と反対する組に争いながら救いを求めていた。小川大尉も半信半疑ながら帰国説を打ち消してはいなかった。

その願望を乗せた列車は、今われわれの最後の望みを断ち切って、ウオロシロフからウラジオに南下せず、昇ろうとしている太陽の位置からみて、間違いなく頭首を北に変えてシベリヤ深部へ走っている。兵隊も列車が北に向いていることに気づいて一瞬そうぞうしくなったが、それもたちまち消えた。争う気力もなく、みんな倒れ伏してしまった。列車は、森も家も、まして人影一人見えぬ不毛の草原を後へ後へ流して、ひた走りに走りつづけている。

「諸君は近く極東の某港から帰国するだろう」と言明した將軍の虚言を、眼を閉じながら大尉はいつまでも噛みしめていた。

小川大尉はそれから二年ほど過ぎて関東軍の参謀たちと同居するようになって知ったのであるが、終戦時、関東軍司令部に乗り込んで来て、日本の山田乙三司令官と会談したソ連の代表ワシレフスキー元帥は、やはり帰国を言明し、これにたいし山田大將は関東軍ならびに在留邦人の輸送計画を私に任してくれと要請し、その準備にとりかかった四、五日後、新京郊外の飛行場に着一いた一台のソ連機は、ウムをいわず山田司令官はじめ要人数名を拉致し、いずことも知れず連れ去ったということである。

いやしくも一国を代表する最高の元帥が、これも日本軍の代表たる関東軍司令官にぬけぬけと

虚言を弄するとは、いったいだれが信じよう。末輩の小川大尉以下が將軍の偽りを信じたのもあながち無理ではなかった。

ヒゲと運命

何時間走りつづけただろうか？ 夜になって列車は停った。停ったままで、いつまでたっても動きだそうとしない。扉は閉めきられたままである。どのくらい時間がたっただろうか。ガヤガヤと人声が生じた、輸送指揮官に案内されたソ連の将校が四、五名、手燭を下げて入ってきた。西尾大尉も小川大尉の車に連れて来られた。ソ連の将校たちは何やら盛んに声高に話している。大きなセスチュアで激しく言いあらそっている様子である。ときどき、こちらに向って話しかけてくるのだが、通訳がないのでさっぱりわからない。ついに癪癪を起こしてどなりだした。三十分ほどで彼らは引き揚げて行った。扉はしっかり閉められ再び元の静寂にもどった。列車は動きださない。あるいはここで下車するのもいけない。だとすると、ここはどこだろう？

小川大尉はやがて睡魔におそわれた。いつのまにか朝になって、昨夜の将校がまたやって来た。身ぶり手ぶりで「みんな降りろ」という。外はよく晴れていた。大陸の秋は満洲と同じように青く澄みきっていた。満洲より寒いだろうシベリヤの九月にしては、案外暖い朝だった。

人員点呼の後、前後左右を着剣した歩哨に囲まれて前進を命ぜられた。薄汚い人家の密集した街を通り抜けて、そのはずれの板囲いの建物に連れ込まれた。そこがわれわれを収容する兵舎だった。西